

【金沢国税局長賞】

「税に感謝を」

富山県立滑川高等学校一年 常楽 優香

今年の一月一日、石川県能登半島を襲う、大きな地震があった。令和六年能登半島地震だ。

私は当時、母の実家である志賀町の祖母の家に帰省していた。地震が来て慌てて中学校に逃げ込んだ。その日の夜、一人一本の水とクラッカーが配られた。中学生の私がそれだけでお腹を満たすことはできなかったが、不安と心配でいっぱいだった避難所内は会話が弾み、心を満たすことができた。二日の日には給水車が定期的に来るようになり、水不足が解消された。三日には仮設トイレが設置され、トイレ問題も解決した。

避難所で生活している人達にとって、これらはとてもうれしいことだった。このうれしさの裏には税金があるということを忘れてはいけないと思う。地面の隆起で通ることさえも難しい道路の改修や、震度七の地震に耐えてくれた校舎も全て税金のおかげだ。日がたつにつれて多くの救援物資が避難所に届き、被災した地域に活気が戻ってきた。被災前と完全に同じかときかされると、もちろんそうではないが、税金が私たちの生活を支えてくれた。震災時だけでなく、他の災害の時にも税金が使われる。いつも税金を納めるのはこのような時のためなんだと実感した。

たくさんの人を巻き込み、多くの損害を生み出した令和六年能登半島地震。国民は税という日頃から積み重ねてきたお金を使い、非常時を乗り越えてきた。税金というものは、困っている人を助け、皆が使うものの整備する、全員の幸せをつくり出すものだ。これまでの私は「税金」ときくと、消費税や住民税、所得税など何をするにしても引かれてしまうというマイナスなイメージしかなかった。

しかし、税金は、私たちの生活を全面的に支え、災害や震災などの非常時にはたくさんの支援をしてくれるということを知って、マイナスのイメージから大きく変化し、税はありがたいものであり、私たちの生きる社会にとって、なくてはならないものだと思うようになった。いつ、大きな災害が起こるかわからない、地震大国の日本。日本の明るい未来を築いていく国民の一人として、税について深く学び、大人になり、社会に出るようになった時にはしっかり納税し、税への感謝を忘れず日々の生活を送っていきたい。